

大学生を対象とした当事者研究

松 田 治 貴

当事者研究とは、北海道の浦河べてるの家で2001年より行われている、統合失調症などの精神障害を抱える当事者を対象としたプログラムである。その研究成果は約600事例を超えており、当事者研究は様々な領域に広がり、その対象となる「当事者」は急速に拡大をみせている。しかし、研究成果の多くが、精神障害や発達障害のような障害を抱えている人々を対象としており、障害を抱えていない人々に対する事例は多いとは言えない。押江他（2010）は、当事者研究が、精神障害や発達障害を抱えていない人々に対しても有効であり、「自分と付き合う時間」を提供する場になると考え、障害を抱えていない人々が実施し易い方法として「当事者研究サポート・グループ」を開発している。高松（2015）は、当事者研究の実施の難しさ（例えば、テーマ設定や研究方法などの具体的な方法が定まっていない・「当事者」や「研究」という言葉を用いることの困難さ・など）を挙げ、当事者研究の一技法としてライフストーリー・レビューを用いることを提案している。

本研究では、押江他（2010）と高松（2015）の当事者研究の方法を参考に、精神障害や発達障害のような障害を抱えていない人々を対象とする当事者研究の方法を考案・実施し、「大学生に適用可能であるか」及び「適用することで得られる効果」を探索的に研究することを目的とした。

大学生及び大学院生を対象とし、9名（男性3名、女性6名）からの協力が得られ、グループ形式で3回実施した。1回のグループは、ファシリテーターを含めて約5名で、所要時間は約90分であった。「他者を否定する・傷つける発言の禁止」、「発言を強制しない」についての説明を実施前に行った。

本当事者研究の基本的な構造は、(1)グループの説明（約5分）、(2)アイスブレイク（一人約2分、合計約10分）、(3)テーマの提出（一人約2分、テーマの決定に約5分、合計約15分）、(4)語り手がテーマについて語る（約25分）、(5)ディスカッション（約15分）、(6)まとめ（約10分）、(7)調査用紙への記入（約10分）であった。

当事者研究の内容及びアンケート（質問項目・自由記述）の分析の結果、本研究の効果として、「自分と付き合う時間」「思考の整理（外在化）」「新たな気付き」「語りによる相互作用」「更なる意欲」が考えられる。また、本研究の環境として、「話し易さ」「傷つき（の無さ）」が示唆されると考える。加えて、参加者9名中8名から「また参加したい」との回答が得られ、本研究が大学生に適用可能であると考えられる。